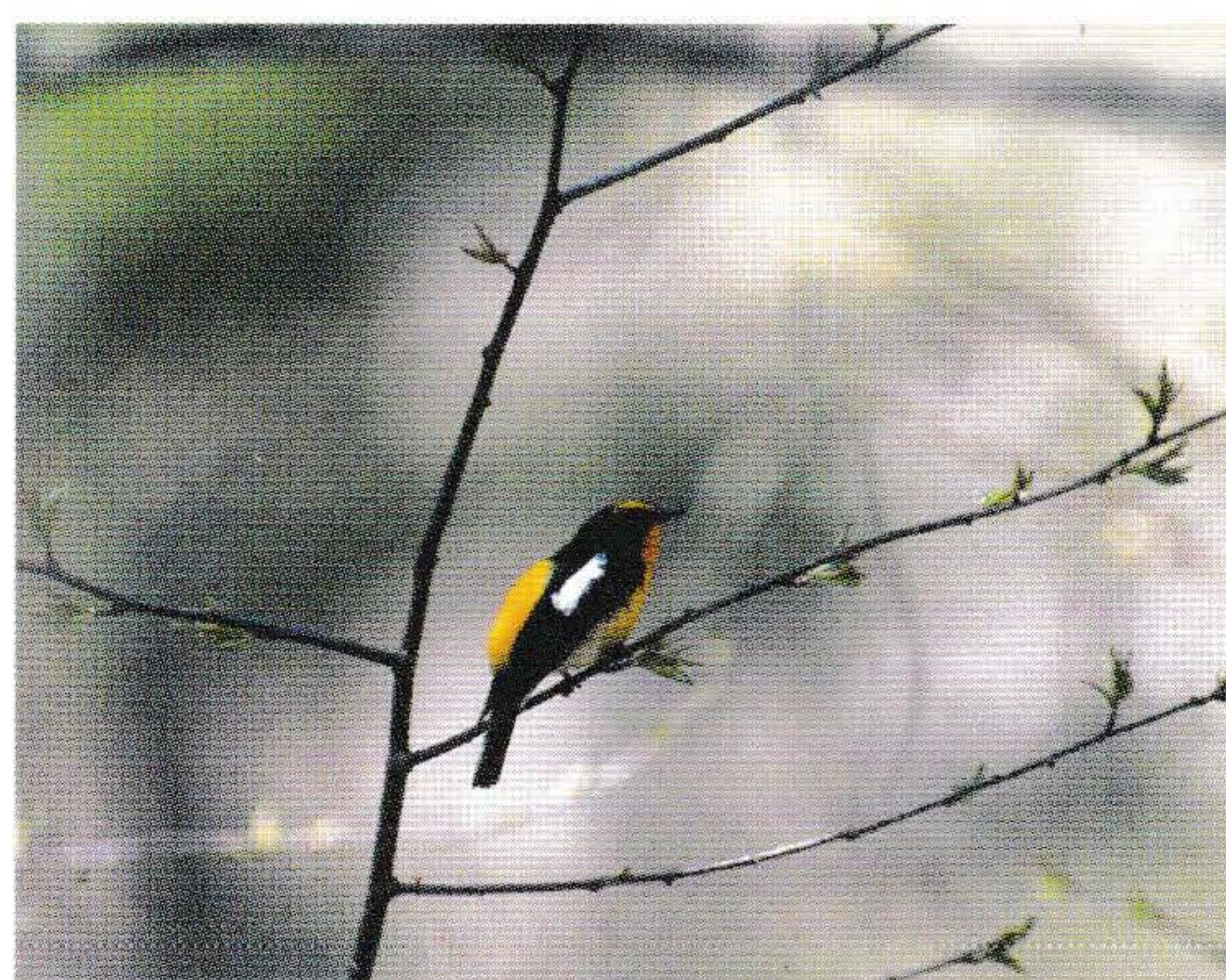


座光寺の野鳥

座光寺には、どんな野鳥がいるのでしょうか。環境によって生息する野鳥の種類は違ってきます。座光寺は鳥からみると西から山地の二次林（断層崖を含む）、農耕地と市街地、天竜川の河川敷と大きく3つの環境に分かれます。その環境毎に野鳥を見ていきたいと思います。

山地二次林の野鳥

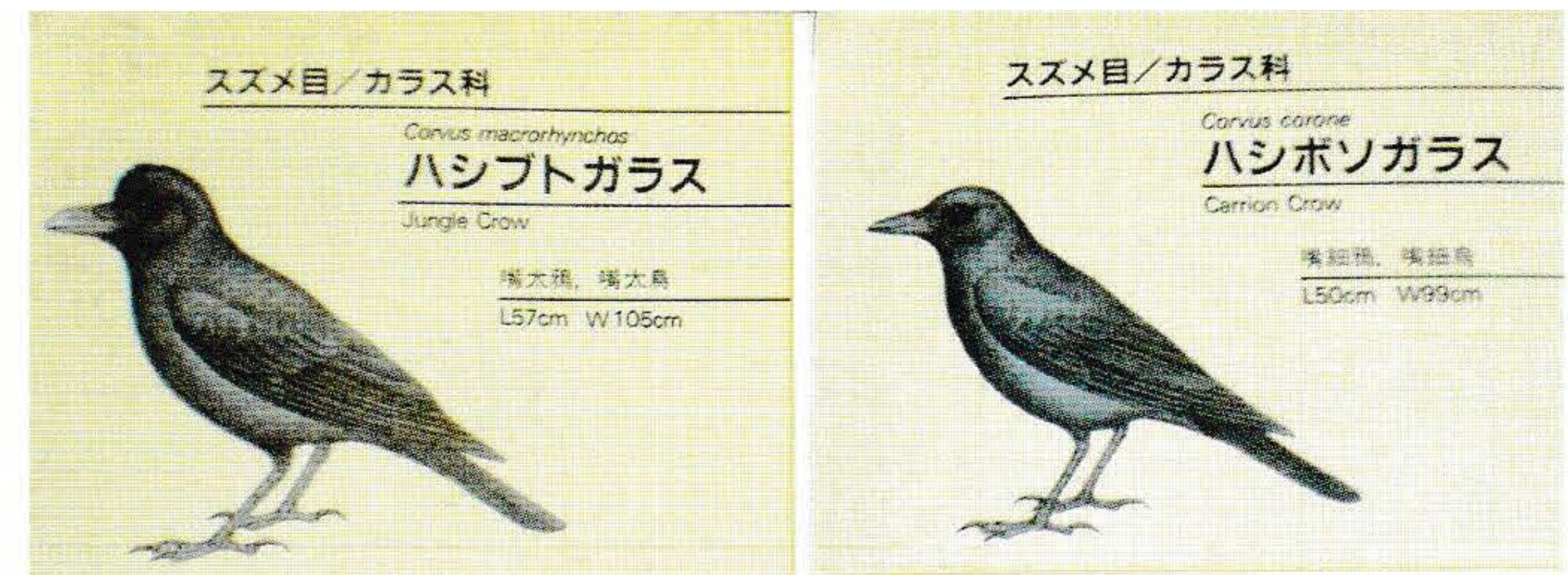
山間地では、森や林の鳥が見られますが、特に夏には、フィリピンやインドネシアなど南方の国から美しい姿の夏鳥が渡ってきます。オオルリやキビタキが夏鳥の代表格です。ゴールデンウイークに入る直前ぐらいに渡ってきて、オオルリの雄は木の梢の上で美しい声でさえずります。キビタキは、林の中程の枝でさえずります。なわばりを確保して、繁殖するためです。オオルリもキビタキも姿がきれいで、人気のある鳥です。特にオオルリは、背中が青く、幸せの青い鳥のようです。春から夏にかけて、夏鳥達の美しいさえずりを聞きながら、山道を歩くのも楽しいものですね。



キビタキ雄

農耕地と市街地の野鳥

市街地には、人間に依存している鳥たちが住んでいます。スズメ、ツバメ、キジバト、カラスなどを思い浮かべるでしょう。実は、単純にカラスという名前の鳥はありません。座光寺で見られるのは、ハシボソガラスとハシブトガラスです。くちばしが太くて、おでこが角ばっているのがハシブトガラスで、くちばしが細いのがハシボソガラスです。山間地には、ハシブトガラスが多くいます。また、天竜川沿いには、ハシボソガラスが多いです。では、山と川の間の市街地には、どちらの種類が多いでしょうか。調べてみるとおもしろいですね。

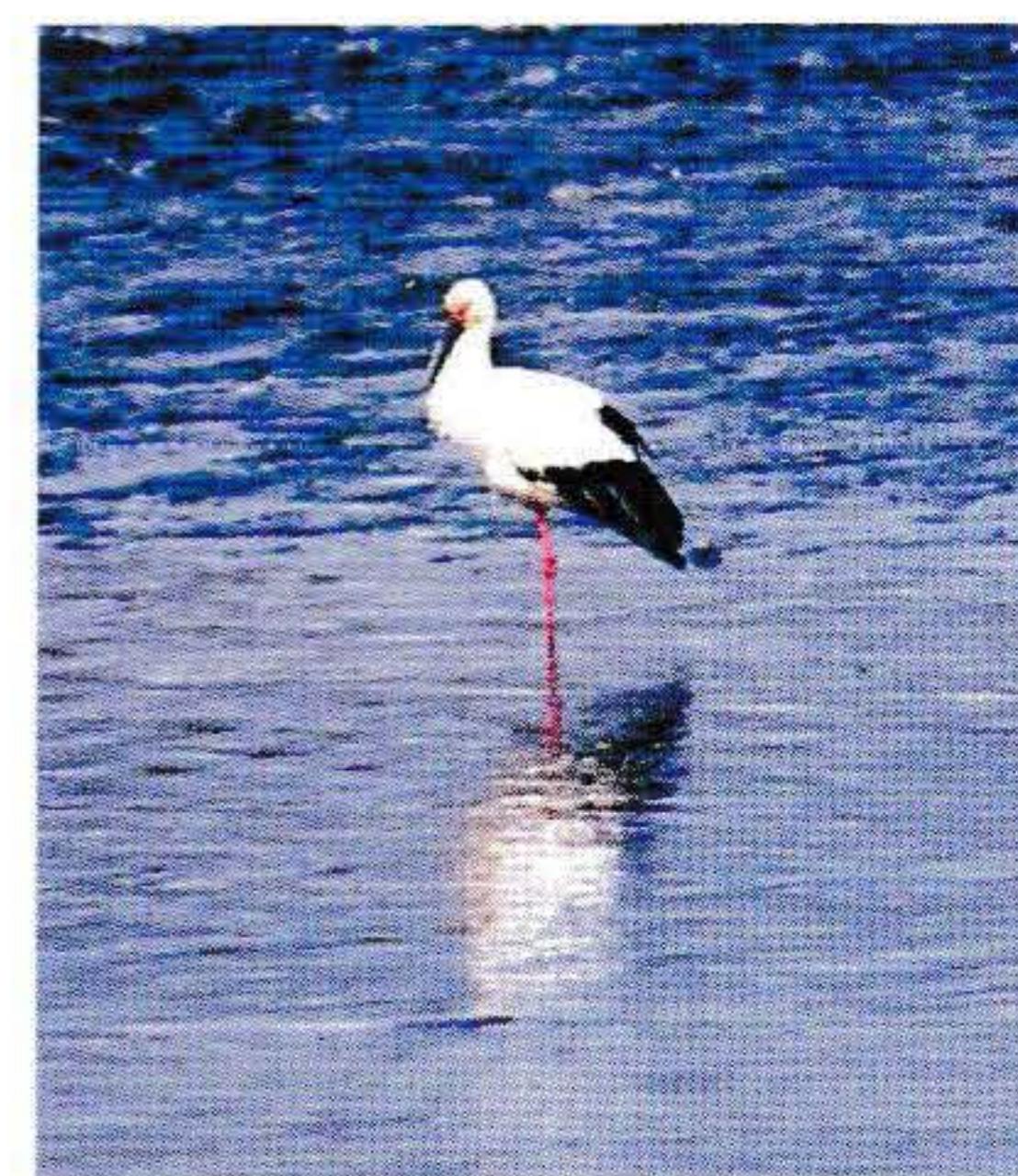


カラス2種（山溪カラー名鑑「日本の野鳥」より）

天竜川河川敷の野鳥

天竜川沿いには、川の鳥も見られますし、タカ類や林の鳥も見られます。山に比べると開けていて観察しやすいです。時々、珍しい鳥がふらりと飛来してくることもあります。最近でいうと、2004年12月天竜川弁天橋北側に1羽のコウノトリが飛来してきました。

また、2006年の冬には、多数のコハクチョウが長い間滞在しました。コハクチョウは、諏訪湖までは毎年飛来しますが、下伊那まで來るのは、とても珍しいことです。



コウノトリ



コハクチョウ

(鷺田俊一)

魚の分布と私たちの生活

川や池の中にはいろいろな魚が棲んでいます。それぞれの魚の分布の様子は種類によって大きく異なりますが、私たちの生活とどのようなかかわりがあるのでしょうか。

少なくなったのか？　スナヤツメとアカザ

目の横にある8つのえらが目に見えることから名前がついた「スナヤツメ」と、ひれにとげがありさわると刺されることから「サソリ」と呼ばれている「アカザ」という魚は最近あまり姿を見なくなったといわれます。

昔はよく捕れたそうですが、今では国や県の「絶滅危惧種」に指定されるほど希少な魚となってしまいました。河川改修によって流れが速くなり、川底に砂や石がたまらなくなりました。水が汚れたためではないかといわれています。

しかし、最近の調査では天竜川（アカザ・スナヤツメ）や土曾川・南大島川（スナヤツメ）で捕えることができるようになり、一時より増えているのかもしれません。

稻作りとドジョウ・モロコ・メダカ・コイ

春、田植えが近づいた水田には満々と水が湛えられ、浅い大きな池になります。すると、まわりの水路からドジョウやモロコ・メダカなどがはいってきて、秋までここで過ごします。その間、温められた水の中で豊富な餌を食べて卵をたくさん産みます。また、稻が混



上：スナヤツメ 下：アカザ

んでいるので鳥や大形魚に見つかりにくく稚魚たちも安全に過ごすことができます。やがて、田んぼから水がなくなる秋になると魚たちは再び小川にもどり冬を越すのです。

ところが、最近の水田の構造改善によって水路と水田の高さがずれてしまい、魚が川と田んぼを行き来できなくなったりことやコンクリートの水路のために小さな魚がすみにくくなってしまいました。そのためか、現在メダカの姿は座光寺の水田地帯から消えてしまいましたが、ドジョウとモロコ類の元気な姿は今でも見ることができます。そのうちメダカも戻って来てくれることでしょう。

また、昔は水田に2～3cmのコイの仔魚を放し、秋に15cmぐらいに育ったコイを捕まえて池に移すということがよく行われていました（田ゴイ）。しかし、最近はやる人がいなくなったので水路へ逃げ出すコイがいなくなり、川のコイも少なくなりました。

急増している関西からの移住魚カワムツ

「カワムツ」あまり聞きなれない名前ですが、今では天竜川付近の小川で一番よく見かける魚です。体長は12～13cm以下で、同じコイ科のオイカワやアブラハヤとよく似ています。

もともとこの魚は濃尾平野から西の地方に生息して、東日本にはすんでいませんでした。ところが、1980年代に飯田市川路の久米川で長野県で初めて生息が確認されました。その後、天竜川に沿って上流下流へと分布域を広げ、最近の調査では阿南町から駒ヶ根市までの天竜川



上：オス(婚姻色) 下：メス

や支流に生息していることが分かっています。座光寺の土曾川や南大島川・下段の用水路には2003年ごろから棲みはじめ、今では最もよく目にする魚となっています。

このことは関東などの東日本各地でもみられ、その理由として、ある年に琵琶湖産のアユに混じって放流され、それが定着したのではないかといわれています。ちなみに長野県では天竜川以外の川の周辺ではまだ生息が確認されていません。

海と行き来できなくなったアユとウナギ

春から夏の間、石に付いているコケなどを食べて大き

く育ったアユは、秋を感じる頃になると天竜川を少し下り、砂礫が集まった川底に卵を産んで一生を終えます。そして、孵化した仔魚たちは

ただちに太平洋を目指して川を下り、河口近くの海で冬を過ごします。やがて、海で育った元気な若アユは、春の訪れとともに親が暮らした天竜川の上流を目指して遡ってきます。この繰り返しが本来のアユの生活です。

ところが、現在飯田地方にすむアユは、下流に造られたダムのために海と川を行き来できなくなってしまいました。だから、ダムより上流の天竜川では毎年、他の地域で育った稚アユを放流しています。

一方、蒲焼きで有名なウナギも川と海を行き来する魚なので（アユと違い海で卵を産む）、アユと同じように放流に頼っていますが、その数は少ないので飯田地方の川でウナギを捕まえることは非常にむずかしくなっています。

海へ下ることをやめた（陸封化）アマゴ

飯田地方でアメノウオと呼ばれているアマゴの祖先は、サケと同じように川の上流で産まれ、仔魚は川を下って海で育ち、大きくなると卵を産むために再び生まれた川へ戻ってくるという生活パターンを持っていました。このように海と川を行き来するアマゴはサツキマスと呼ば

れていますが、岐阜県の長良川では今でもそれが見られるそうです。

ところが、水温が上昇したために川の下流域や海での生活が困難になっただけでなく、ダムなどで移動ができなくなつたことから海へ下ることをあきらめ、一

生を川で過ごす個体が出てきました（陸封化）。それはアマゴと呼ばれ、渓流にすむ代表的な魚となっています。まれに天竜川や周辺の川でアマゴ特有の紫色の楕円形の斑点（パーマーク）が消えた銀色の個体（スモルト個体）が捕まることがあります、これは自分の中に残っている祖先の遺伝子の働きによって海をめざして川を下る個体と考えられ、自分は繁殖に参加しないで海に下るという意思を仲間に示すために、パーマークを隠しているのだといわれています。

ちなみに、座光寺の南大島川や土曾川の中・上流域でもアマゴの姿を見ますが、ほとんどが放流されたもので、ここで産まれた個体はわずかではないかと考えられます。

鳥に食べられるウグイ・オイカワ・アユ

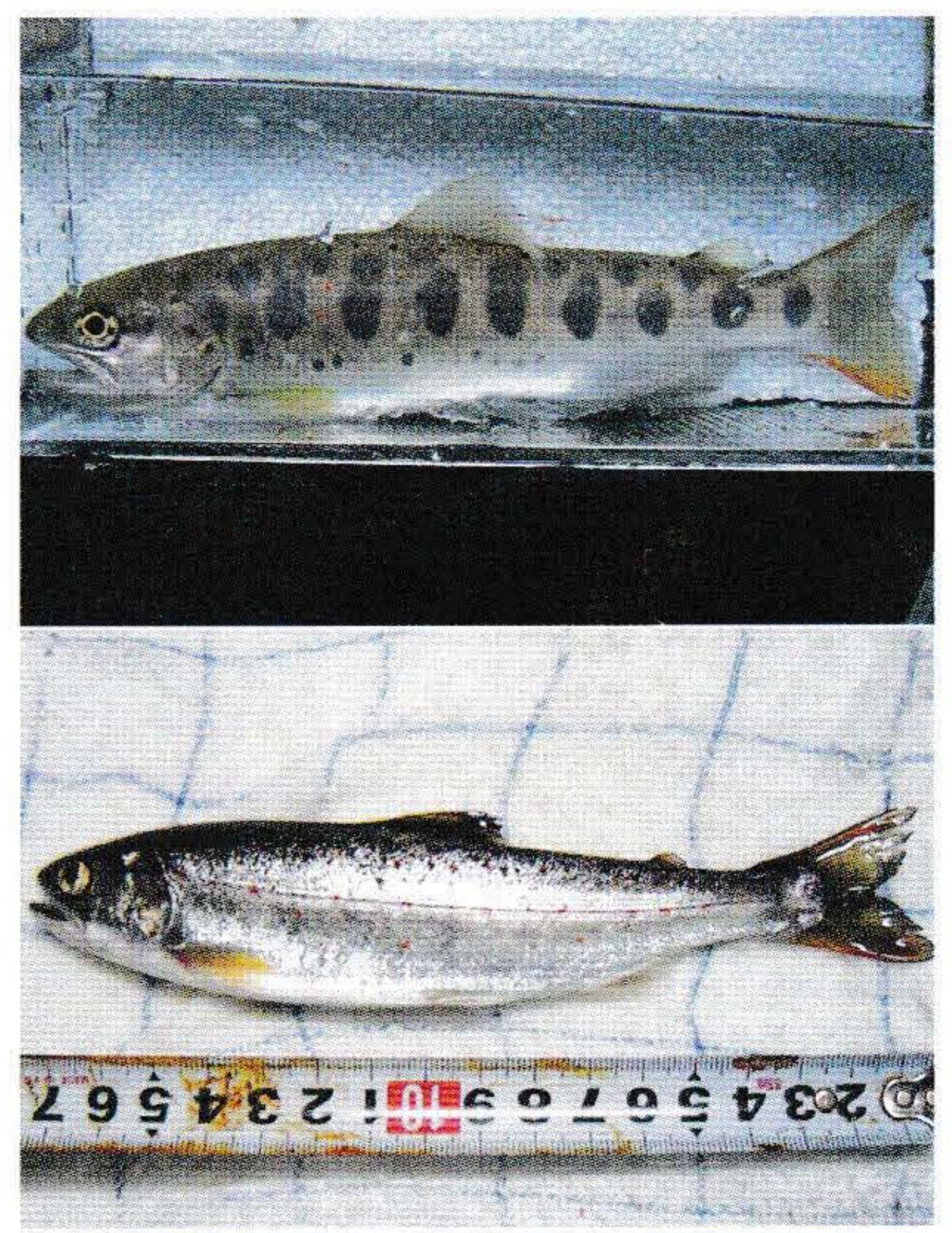
近年、写真のような鳥が天竜川で泳いだり、上空を並んで飛んだりする姿を見たことはありませんか。これはカワウという鳥で、天竜川では1990年ごろから姿を見るようになり、羽を乾かすカワウ

しています。川や湖の魚を食べることから、漁業関係者の頭を悩ましている鳥です。

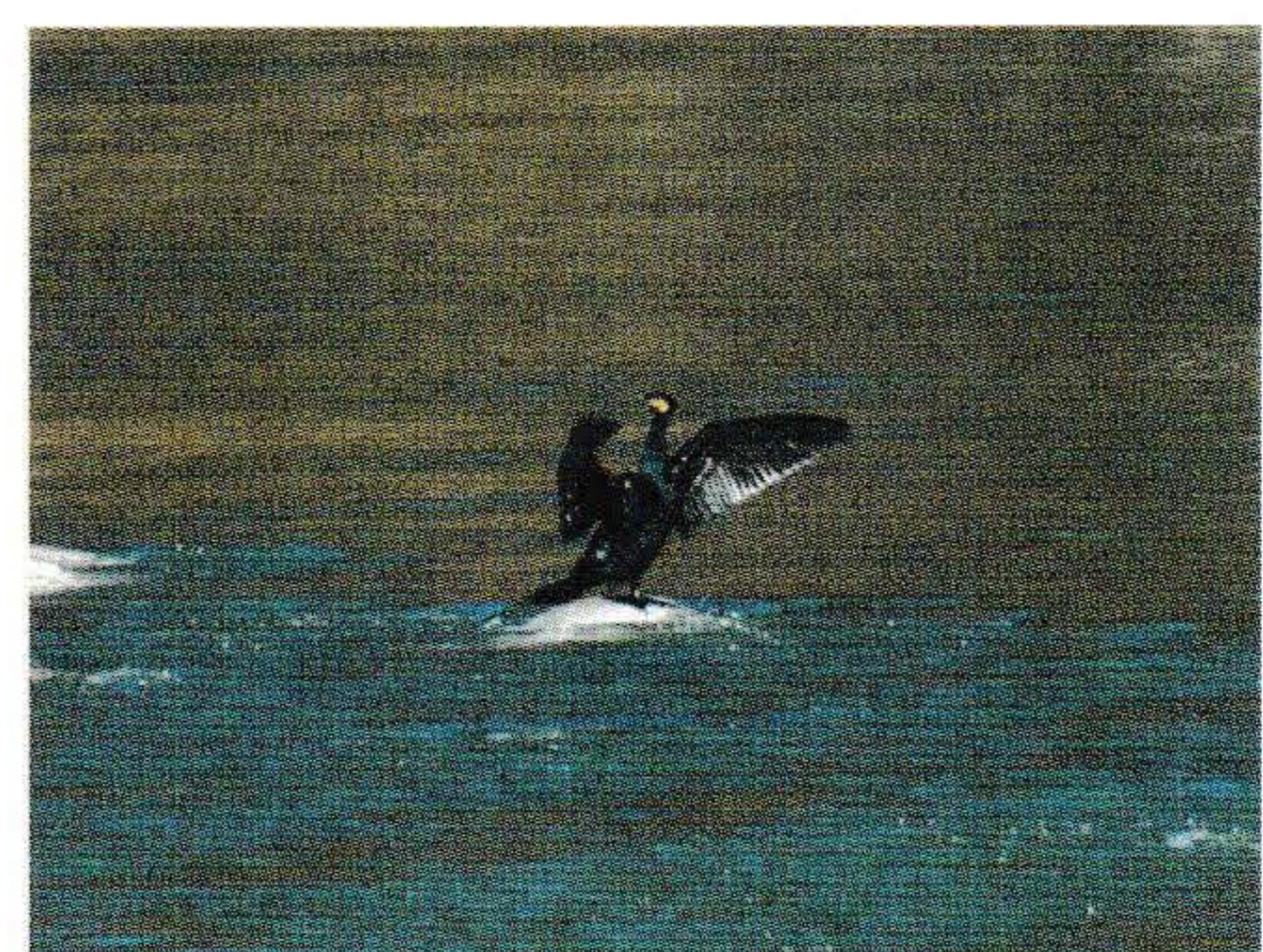
専門家がこの鳥が食べる魚について調べたところ、最も多く食べられている種類はウグイ（別名アカウオ）・オイカワ（ハヤ）・アユでした。アユは秋から冬にはいない



丸々と太ったアユ



アマゴ 下はスモルト個体



羽を乾かすカワウ

ので、1年中棲んでいる前の2種への影響は大きいと考えられます。この鳥は昔、全国で1500羽ぐらいまで減った時期があつて保護されたこともあります。今ではこんなに増えてしまい全国各地で困っています。

同じように、最近アオサギというツルみたいな大きな鳥も天竜川周辺で多く見られるようになり、魚だけでなくカエルや虫にも影響があるのではないかと心配されています。



上：ウグイ 下：オイカワ

こわい顔をしたカジカは砂礫の底が好き



カジカ

南大島川には大きな顔と口がなんとなく恐いカジカという魚が棲んでいます。昔は早春の川に入り、石の下などに隠れているこの魚を捕まえてその味を楽しんだものです

豆知識 **天竜川の生物今昔**

川は生物にとって独特の環境です。とりわけ天竜川ほどの大河になると、川環境に適応した生き物がたくさん棲んでいます。かつて遡上したウナギ、アユなどは典型的な例です。

近年は河川の管理が行き届いたために環境が変化して、生息しなくなった生物もいます。例えば上流にえん堤やダムができて洪水が起こらなくなりました。そのため砂礫地が無くなり、ニセアカシアなどの林が河川内にできたのです。それまで石がごろごろした所に営巣していたイカルチドリ、コアジサシがいなくなってしまいました。砂地に棲んでいたハマズズも見当たりません。

近年になって渡ってくるようになった鳥にカワウがあります。1993年に初めて確認されましたが、年々増えて今では500羽ほど。また当初は冬季だけでしたが、最近は夏でもわずかに残っています。活動範囲は泰阜ダム～辰野町まで、駒ヶ根市の吉瀬ダムを境にしています。カワウは水に潜って、魚を獲る能力が強いので、漁業への影響が心配されています。

河原の砂地に適応したハマズズ
このような体の色や模様を隠蔽色という。本来の生息地は海岸の砂地だったが、古い時代に天竜川を遡ってきた。近年は砂地が無く、見られなくなった。



が、そのころから比べると数が少なくなったようです。この魚はきれいな水の流れと石と砂がたまつた川底は好きですがコンクリートの岸や底は苦手なようで、南大島川でもそのような場所には棲んでいません。

急増しているアメリカザリガニ

土曾川の下流や阿島橋に流れていた用水路でタモ網を使って魚の調査をすると、迫力ある赤いはさみを持ったアメリカザリガニがびっくりするほどたくさん捕れます。以

前からこの地域で姿を見ることはありましたが、その数は最近になって著しく増えているといえます。昭和のはじめに食用ガエルの餌としてアメリカからわが国へ移入されたものが、この地域まで広がっていることが分かります。



アメリカザリガニ

(大原 均)

陸の貝・水中の貝

貝というと水の中のアサリやハマグリを思い出すかもしれません。カタツムリは陸にいる貝のなかまで、タニシやシジミは水の中にいる貝です。座光寺で見られる陸の貝と水の中の貝についてまとめてみました。

希少な大きなカタツムリ！！

私は平成6年から10年まで座光寺小学校に勤めていました。その間探していたカタツムリがあります。残念ながら見つかりませんでしたが。ところがこの夏、小林正明さんからこんなカタツムリがいたと写真添付のメール



ミスジマイマイ

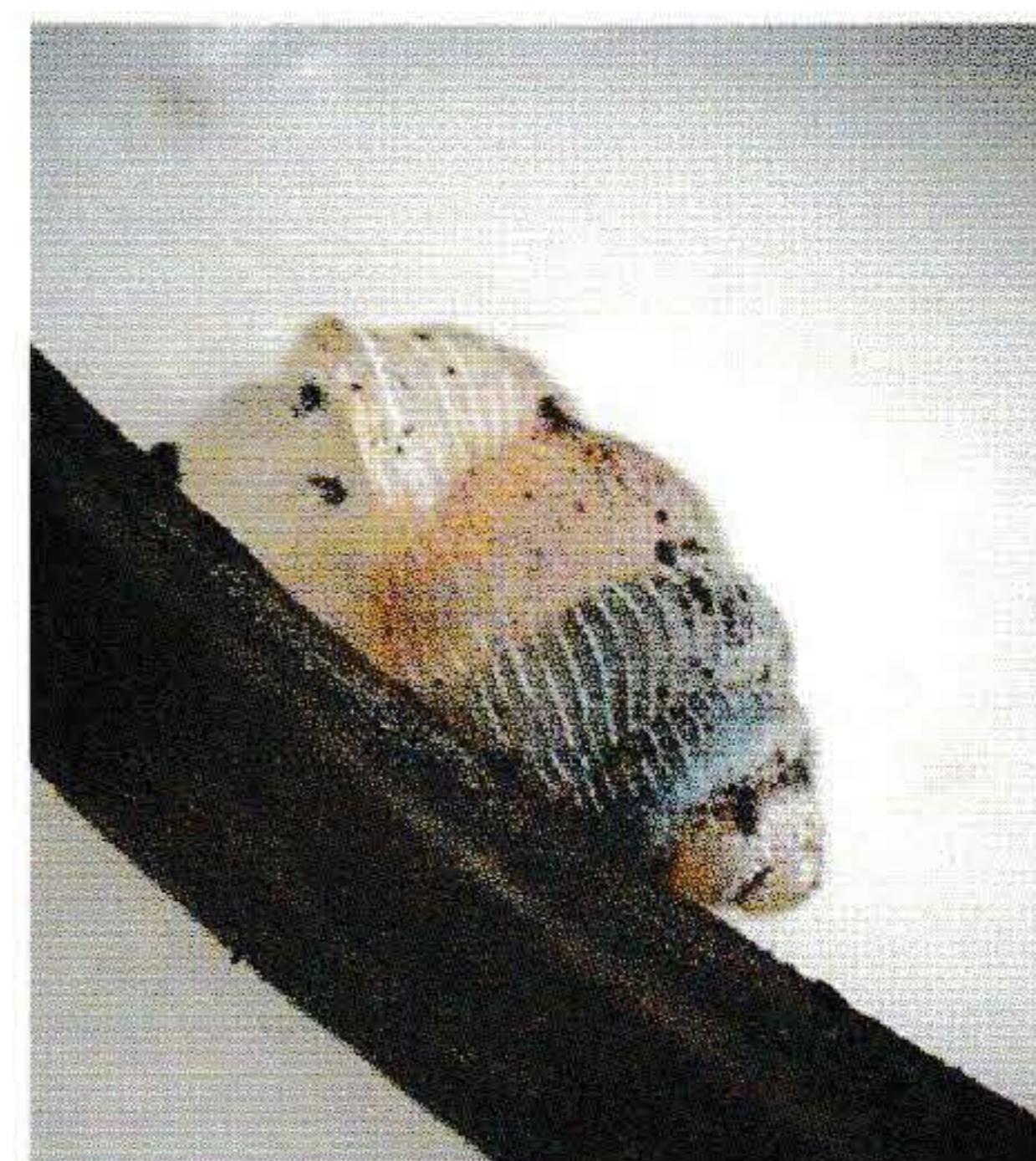
貝殻の茶褐色の線は1本のもの、中には0本のものなどいろいろあります。

を戴きました。探していたミスジマイマイです。宮崎地区での発見ですが、まだこうしたカタツムリが見られる豊かな自然が残っていることに

喜び安心しました。

スギの朽ち葉の中には小さな貝が

右の写真はヒダリマキゴマガイと言います。スギや広葉樹の朽ち葉の中で生活しています。木の枝に登っているように見えますが、杉の葉のトゲトゲの部分に付いているところです。貝殻の高さは2mmくらいですが、殻には彫刻があり、カタツムリのように角も出します。この他に、座光寺にはスギや広葉樹の朽ち葉の中を注意深くさがすと、ミジンヤマタニシ・キビガイ・カサキビ・オオウエキビ・ヒメベッコウ・ウラジロベッコウなどが見つかります。お隣の高森町上平では、貝殻に規則正しくスジを引いたような長野県内でも珍しいスジキビが見つかっていますので、そんな貝もいるかもしれません。



長野県に最も広く分布しています

果樹園の貝

座光寺にはリンゴやナシの果樹園があります。ナシ園では、年に14~15回消毒をするそうですが、そんな中でもしぶとく生き残っているのが、オナジマイマイとウスカワマイマイです。

リンゴの木の肌はすべすべしていますが、ナシの木はゴツゴツしています。その間は隠れ易いのでしょうか。リンゴ園より、ナシ園の方が多く見かけるのはそうした木の肌と関係があるのかも知れません。



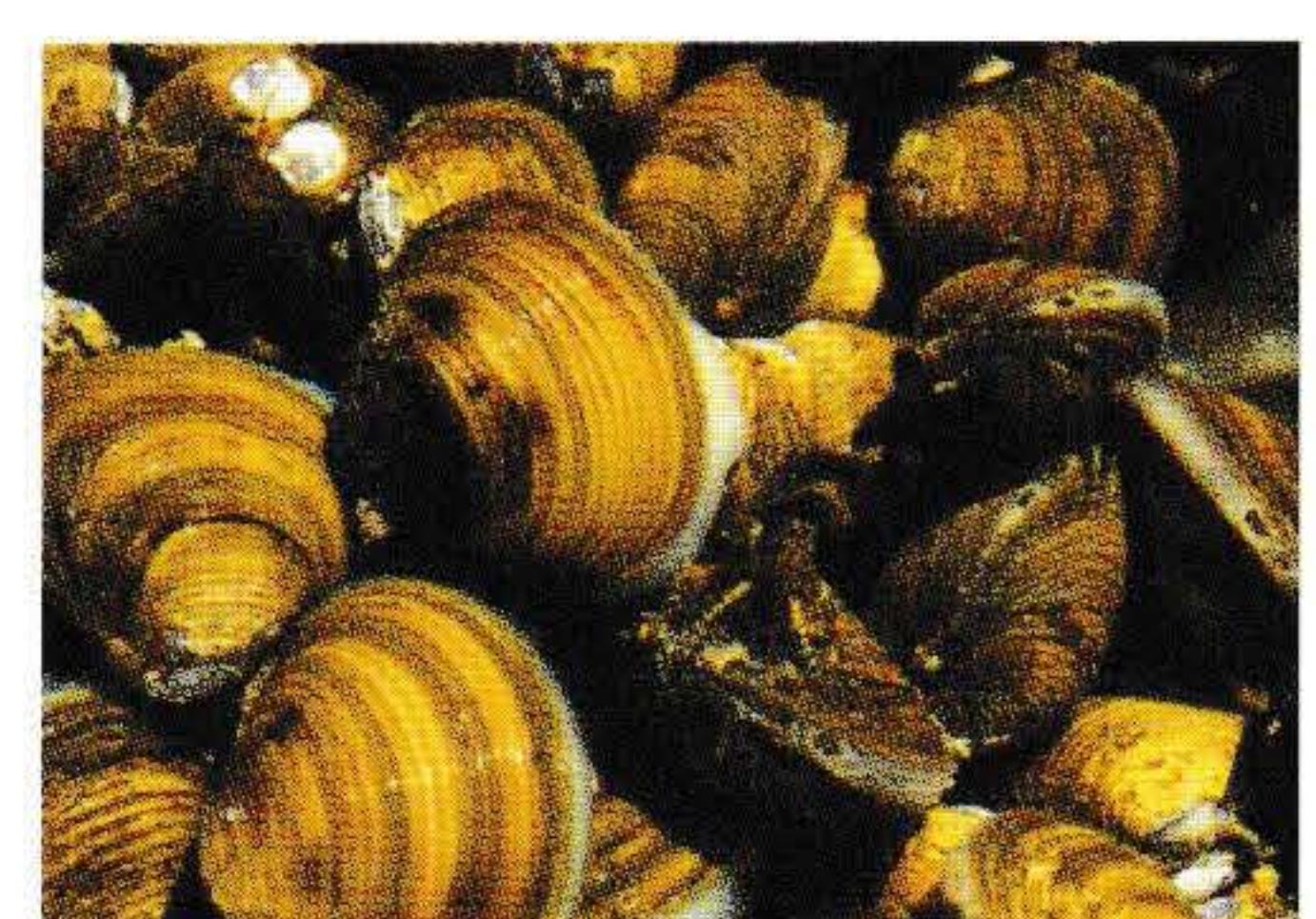
梨の木の元にいたオナジマイマイ

田んぼの泥の中にいる小さなシジミ

田んぼにシジミがいると言っても、急には信じられないかもしれません。右の写真は、万才や恒川の田んぼの水の取り入れ口近くの稻の周りや、足跡の泥の中でごく普通に生息しているマメシジミとドブシジミです。左側の3匹がマメシジミで殻長（貝殻の幅）は、2mmくらいです。右側の3匹はドブシジミの親子です。親の殻長は8mmくらいになります。マメシジミは貝殻をつなぐ蝶つがいの部分が少しづれていますが、ドブシジミはほぼ中央にあるので、区別できます。1mmくらいのます目のふるい（篩）で泥をふるつてみると、見つかります。



右の写真は昭和55年頃万才の堤の出口にいたマシジミです。本種は中河原の川にもまだ少し生息しています。



どんなチョウが棲んでいる？

座光寺にはどんなチョウが棲んでいるのでしょうか。宮崎の松村久さん（70才）は昭和28年～31年まで座光寺のチョウを調べました。現在の座光寺のチョウを調べた人はいませんが、上郷でチョウを調べている井原道夫さん（68才）の話を聞いたり、筆者が観察した現在の様子や文献などから、座光寺のチョウについてまとめました。

座光寺のチョウ相の特徴

井原さんによると「松村さんの資料は過去と比較できる貴重なもので、座光寺だけという狭い地域での46種はよく調べてある。高い山があればもっと多くなる」とのことでした。

昔はいたが現在はないチョウ

松村さんは「オオムラサキは座光寺のどこにもいたものだ。それが今はまったく見なくなった。」という。筆者もオオムラサキが吸蜜にくるクヌギの樹液を見てもクワガタムシ、カブトムシはいるが、オオムラサキは見たことがありません。井原さんは「伊那谷には普通で、移動力のある種なので、狭い範囲では問題ない」という。またミヤマシジミは天竜川にいたが、06年の増水とグランド造成でいなくなってしまったそうです（井原）。

昔はいなかったが現在はいるチョウ



ツワブキの花にきたツマグロヒョウモン雌

昔は全くいなかったが近年は秋に個体数が多い。（宮崎にて）

ツマグロヒョウモンが増えています。「昔はまったくいなかった」（松村）。確かに松村さんが調べた頃は長野県内で迷チョウとして数回記録があるだけでした。ところが現在は初夏から秋に普通に見られます。特に秋には個体数が増えます。この主原因は温暖化とされています。

この他台湾まで移動することが知られているアサギマダラも秋にフジバカマによくやってきます。これも「最近増えたので



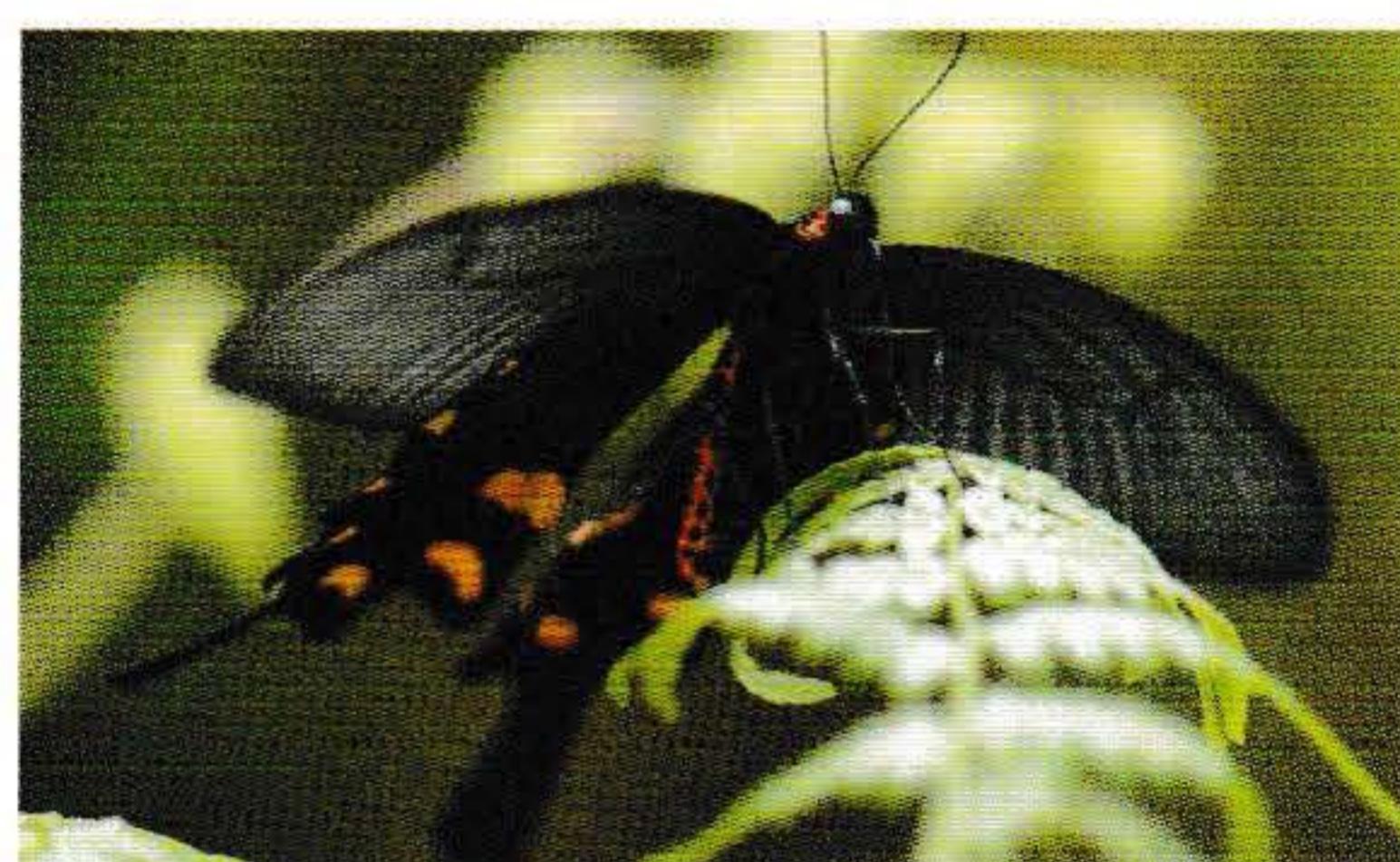
フジバカマに来たアサギマダラ
台湾に旅立つ前と思われます
(宮崎にて)。

は」（松村）と言われています。

座光寺のジャコウアゲハ

座光寺を特徴づけるもう一つの種類にジャコウアゲハがいます。この種類は長野県内でも限られた地域にしかすんでいませんが、座光寺では高岡地区に多数生息します。食草のウマノスズクサが分布するのもこの地域だけで、なぜこの地域に分布するのか、いつから棲んでいるのかわかっていません。

また井原さんはクロコノマチョウを南大島川で、筆者はミズイロオナガシジミを西の沢で観察しています。



ジャコウアゲハ（高岡にて）

（小林正明）

豆知識 座光寺のチョウ

昭和28～31年にかけて記録したもの（計46種 ○印は少なかった種）
(アゲハチョウ科) ○ウスバシロチョウ、キアゲハ、アゲハ、○クロアゲハ、オナガアゲハ、カラスアゲハ（シロチョウ科）
モンキチョウ、キチョウ、○スジボソヤマキチョウ、モンシリチョウ、スジグロシロチョウ、○ツマキチョウ（マダラチョウ科）○アサギマダラ（ジャノメチョウ科）○ヒメウラナミジャノメ、ジャノメチョウ、ヒメジャノメ、ヒカゲチョウ、○クロヒカゲ、キマダラヒカゲ、（テングチョウ科）テングチョウ（タテハチョウ科）コムラサキ、ゴマダラチョウ、オオムラサキ、○スミナガシ、イチモンジチョウ、コミスジ、○オオミスジ、○キタテハ、○シータテハ、アカタテハ、ヒオドシチョウ、○キベリタテハ、クジャクチョウ、ルリタテハ、ウラギンヒョウモン（シジミチョウ科）○アカシジミ、ベニシジミ、ウラギンシジミ、○ミヤマシジミ、○ヤマトシジミ、ルリシジミ、ツバメシジミ（セセリチョウ科）ダイミヨウセセリ、○スジグロチャバネセセリ、○ホソバセセリ、イチモンジセセリ

（松村 久）